高橋和巳全集

第四巻

高橋和巳全集

第四巻

監修 吉川幸次郎
埴谷雄高

河出書房新社

高橋和巳全集 第四巻

小説4 © 1977 Printed in Japan

一九七七年 十月十五日 初版発行
一九八九年 十月 四日 三版発行

著者 高橋和巳

発行者 清水 勝

発行所 河出書房新社
東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二
電話 〇三―四〇四―一二〇一
振替 東京〇―一〇八〇二

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取替えいたします
ISBN4-309-60504-4

堕落　3
もう一つの絆　121
白く塗りたる墓　187
解題・補記　355

第四卷 小說4

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

堕落——あるいは、内なる曠野

第一章

なぜ涙を流したのか。広大な新聞会館のホールには式典ののちの映画試写を楽しもうとする数多い参会者がつどい、彼が呟きはじめるだろう言葉を待っていた。旧知の者もあるいは混っていたかもしれない。真白なテーブルカバーが時折り写真のフラッシュに輝き、あふれるように花のもられた青磁の花瓶が、体を支えている肘の震えにともなって微風に揺れるように揺れていた。たしかに長年の労苦があり、回顧すればまた当然秘められた罪や悲哀にもふれねばならなかった。しかし今、参会者の期待しているのは個人的な悲哀の蘇えりではなく、彼の年齢も場所柄をわきまえぬ抒情にはふさわしくなかった。

本当はこの世のためを思ってした行為ではないと暴露すべきだろうか。それとも私の施設より巣立っていった若者たちの幸せはまた我が幸せでもあると、厚顔な常套句に自己韜晦すべきであろうか。

最初に、栄誉をうける者として紹介されたのは、東洋第一を誇るダム建設に新しい工法をあみ出した技師たちの一団だった。痩身の技術課長が代表として賞状をうけとったとき、拍手が会場の片隅からまず起った。それは多分、本来なら代表者とともに壇上に居並ぶべき影の協力者たちだったろう。ひかえ目な拍手の音は、彼らがなし遂げてきたことに比して小さすぎた。だが会場の片隅で、分ちあうべき名誉を子供っぽく喜んで

いる技師たちの表情は、卒業式の少年たちのように素直だった。代表者の敬礼も挨拶もまた簡単で朴訥だった。つぎにスポーツ界に覇をとなえたバレーボールの女子チームが団体表彰され、意外に背丈の低い監督と圧倒的な体軀の団員一人が質素な服装で脚光をあびた。女子選手は美しかった。しかしそう見えたのは、控えの席から斜めにみている彼の審美眼が幾分、古風なものだったからかもしれぬ。監督がとつとつと話す訓練の経過には、また飾らずして、人をうなずかせるものがあった。スポーツは為すものにとっても、また見られる場にあっても常に透明なのだ。だが、順番がやがて彼にまわってきたとき、誇るべきなにものもそなわってはいないことを彼は唐突に自覚した。

「本年の社会福祉事業団体への表彰は、神戸郊外の兼愛園において、敗戦以来、混血児の収容と育成および職業指導に従事されました兼愛協会の方々であります」司会者はメモの紙きれをマイクに隠すようにしながら、園長青木隆造を紹介した。彼は壇上になめに並べられた控えの座席から、会場の最前列にいて彼の顔をみつめている秘書と視線をあわせた。妻が病んでいて、代りに伴ってきた彼の事業の最初の共鳴者の顔は、彼女自身が雛壇に立たされるかのように緊張して蒼白だった。その緊張が感染したのだろうか。

「青木隆造氏は敗戦にいたるまで中国の東北、つまり満洲におられました。戦前、東亜同文書院を卒業されてのち、満鉄社員として上海より満洲にわたられ、当時の満洲青年連盟の一員として活躍され王道楽土の理想実現のために献身されたとききますが、不幸、事態は周知のごとく青年の理想を裏切る方向にのみ進展し、ついに敗戦を満洲の瀋陽、当時の奉天でむかえられたと私どもは聞いております……」

青木は中腰のまま無意味に懐中時計で時刻をたしかめ、司会者の紹介のおわるのを待った。奇妙に肩がこっているのを意識し、日頃のように首をねじまげようとして彼はそれを抑制した。彼がその青春を満洲で送ったことは審査委員会に提出した書類の職歴欄にもしるしておいたことである。だが紹介者がわざわざそのことを参会者に披瀝するとは予想していなかった。そして司会者の鄭重さが、満洲といういまは虚空に消えた国名と、彼の人柄をたたえるために〈理想〉という言葉とを不用意に結びつけたとき、彼の内部に見極め

がたい曠野のイメージと、喪った時間の痛みとが隠微な軋み音をたてた。

「敗戦後、一時シベリアで抑留生活を経験されてのち、内地にひきあげられ、しばらく郷里の中学校の教員をなすっていたときますが、神戸をはじめ大都市にあふれる浮浪児たちと、進駐軍のとどまるところに次次と産みおとされては見棄てられる混血児を、一ヵ所に収容して保護・教育することを決意され、山林を売りはらって自宅を解放し、ただひとりで福祉事業をはじめられたのであります。施設を拡大しなければならぬ過程で、いろいろ業者にだまされたりしたこともおありだとうかがっておりますが、本来それをなすべき国家にかわり、戦後処理の一端をすすんで担われた功績と、その後に各地に遅ればせながら生れました宗教団体等による愛護施設に対しても、そのたえざる研究によって少なからざる指導をされました努力に報いるものとして、当新聞社は、ここに福祉事業団体賞を青木隆造氏およびその協力者の方々に贈ろうとするものであります。すでに戦後ではないと経済白書に謳われましてからもすでに十年、しかしなお終らざる戦後を我が身にひきうけられました労苦に対する主催者側の微意として副賞二百万円を添えるものであります。青木氏がこの事業をはじめられますについては、相応の動機と御覚悟があったと推察されますが、御挨拶のなかにそのこともまた盛られるであろうことを期待したいと思います」

賞状と副賞とを、兵役をなつかしむ在郷軍人のように不動の姿勢で受けとったときも、彼は微熱でもあるように、体の疲れを意識した。さらに挨拶のために壇上へゆっくりと歩んでゆく間、参会者の視線が彼の顔にではなく、頭部に集中していることにも彼は気付いていた。彼はまだ五十二歳にすぎない。だが彼の髪の毛は真白だった。なぜ、この髪が一挙にして霜をおおうにいたったかを耳を覆わずに聴ける人が何人いるか。ああ、満洲――と彼は思った。はじめの心づもりでは、まず謙虚な謝意をのべ、本来の事業はすでにその任務をおえたこと、精神薄弱児収容所へと施設を転換するためにこの副賞は使用されるであろうこと、そして要するに人間がいくぶん感傷的にできているための世すぎであることを軽い諧謔の調子で述べるつもりだった。だが、感謝の言葉を口にしようとして、はやくも彼はつんのめった。形式的に置いてあるにすぎない水

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

挿しから水をくもうとし、そしてコップに小さな埃が浮いているのを彼は見た。彼の目にはその埃が蠅の死骸のようにみえた。何秒ぐらい、じっとしていただろうか。

目の前が急にぼやけ、何も見えなくなった。

夜の船から見はるかす海のうねりのように、音と湿気と気配のみある深い広がりが、そのとき彼の前にあるすべてだった。

——内地にひきあげてきて以来、俺の人生は本当は虚無だった。今の俺は形骸にすぎない。そしてその形骸を称讃しようとするあなた方は、悪意の者か、でなければ虚偽だ。……彼の思弁は式場の雰囲気とは無縁に堂々めぐりした。この壇上にのこのことあがった、耐えがたく俗化した自己。それを薦めた人々、そして拍手の機会をまっている人々、あなた方の道徳もまた恥ずべきだ。はなつべき言葉も忘れ、そして不意に彼は醜い中年の涙を流したのだ。

なぜ涙を流したか。

暗黒の視界に不意にざわめきがして、我にかえった彼の視線に、最前列にいた秘書がハンカチを前に捧げるようにして彼の方に近よるのが見えた。無意識にポケットに手を入れ、内側の縫目をいじっていた彼の動作をハンカチを探す動作と錯覚したのだろう。青木は急速に冷静になり、ほとんど見下すような冷酷さで、水谷久江の半泣きの表情をみた。醜い女、醜い善意——。そのとき、小さな笑い声とともに、会場全体にどよめくような拍手が起った。拍子の音は、音それ自体の物理的な共鳴によって一層激しくなる。

結局、ひとことも喋ることなく彼は、彼に代ってすすりあげる秘書の肩を抱くようにして控室に去った。控室の扉をとざしてのちも、しばらくの間、無言のままの受賞者に対する故なき称讃の響きはつづいていた。当の本人には、道徳的な脅迫のように響いていたことを、参会者たちは知っていたのだろうか。

それにしても、すべてがあまりにも、みみっちいと彼は不意に思った。そして、それが烈しく振幅した一時の感情のなかでの、もっとも真実に近い感慨だった。

2

駅頭に立ったときは、雨が降りはじめていた。レセプションには彼らは出席しなかった。式典を主催した新聞社の事業部には、各地の福祉団体や宗教団体、地元兵庫県出身の代議士などからの祝電とともに、満洲時代の同僚や開拓団の指導者、そしてまた彼の親しく交わっていた青年将校の生き残り、いまは商事会社の重役や自衛隊幹部になっている右派の理想主義者たちからの再会の申し出も混っていた。だが青木は、一応それらの住所や連絡先を手帳に書きとめながらも、招待に応ずるつもりもなく、タクシーを駅へいそがせた。身をまもる権利は彼にもあるはずだからだ。

「わたくしが先に賞状をおあずかりして帰りますから、先生は昔のお友達とお会いになられたら」すこし背のひくすぎる水谷久江は、雨の滴に光る髪をおさえて仰ぎみるようにして言った。ちょうど、行楽シーズンと重なって、待合室は小雨にもめげず、リュックを担いだ青年たちで混雑していた。腰をおろす座席もなく、やむなく入ったホームには、列車の姿はなかった。

「今日は土曜、明日は日曜ですのよ、先生」保母長を兼ねる秘書は、体軀にも容貌にもめぐまれない女性だったが、女であれば女としてのささやかな夢や欲望もあるのだろう。彼に休養をすすめる彼女の口調がむしろ率直な休息を欲していた。この機会に日頃の献身に少しは報いてやってもいいと彼は思った。それだけの気持の余裕はとりもどしていたのだ。

「昔の友人の招待はともかく、厚生省にも寄っておかねばならない。あわててホームまできてしまったが、考えてみれば、すぐ帰るわけにもいかない」

「それに本当はその副賞のお金も銀行におあずけになった方がよろしいですわ。万一おとしたりしたら……」

「しかし今日は土曜日なんだろ」

久しく慈善的な学園という閉塞的な社会にとじこもっていたためか、ホームから階段、そしてまた別のホームへと流れうごく雑沓が神経的に耐えがたかった。いつごろから、このように羸弱(るいじゃく)な精神、虚弱な神経になりさがってしまったのか。組織は拡大したとはいえ、わずか二十人の保母たちや栄養士や教師や事務員たちから、園長、園長とあがめられているうちに、彼はこの現代に生きてゆくための闘争精神の大半を滅ぼしてしまっていた。たとえ偽善的なものにもせよ、組織を作りあげ、それを軌道にのせるまでの創業期には男性的な葛藤があった。第一その初期には食糧を確保すること自体が一仕事だった。また施設自体が非公認の段階にあり、なお自活してゆくためには、年かさの孤児には仕事をあたえねばならなかった。狭い農場だけでは自分たちの食糧にもこと欠く。養鶏をやり、屋根瓦の焼物に手を出し、竹細工を作らせ、そして小さな印刷工場をはじめた。そのどれにも彼個人の手にあまる資金がいった。寄付をつのり、銀行から金を借り、そしてまた仕事の注文をもとめて歩く。教育しようにも教師のなり手はほとんどなく、病人がでても、遠方の、ある部落に住む共産党員らしい女医以外に往診してくれる医師もなかった。保健所、教育委員会、県庁、宗教団体、駐留軍教育局、彼は銀白の髪を翻しながらかけずり廻ったものだ。

「あなたはブラック・ドラゴン・ソサエティ（黒竜会）の残党か」とあるとき駐留軍教育局の担当官は言った。施設を視察にきた機会に乗じて、青木が若いアメリカ軍の中尉をおどしたからだ。金策に神経をすりへらしていた彼は苛立って二世の通訳官にあびせかけた。

「自己を裏切るものは常に自己である。日本人はおとなしい。しかしここにいる目玉の青い子供たち、髪の毛のちぢれた子供たちには半ばあなた方と同じ血が流れている。これらの子供たちを見棄てておいて生涯アメリカを憎みつづける人間に育てたいか」通訳からその言葉をききとる間の抜けた間隔をおいて、担当官は怒りに顔を紅潮させた。しばらく二人は睨みあった。だがやがて若いアメリカ軍将校の表情に善良そうな微笑がうかび、帰途には施設への援助を約束した。「つねづね聞いていた通り、右翼(ライト)はゆするのが上手(うま)い」と笑いながら。

動機はどうあれ、これも一つの事業である以上は創りあげてゆくことの張りあいはあった。世間がひとときの侮蔑と驚異をこめて呟いた〈満洲帰り〉のエネルギーがたしかにあったのだ。内地に帰って発病したままの妻を精神病院に入れる余裕ができたころ、何を錯覚してか共鳴者もあらわれた。彼は自己の前歴をあかさなかったごとく、他者の心の内部には立ち入らなかった。しかし、協力者との間には、また自立的な小集団にのみある、家庭的な感情の交わりや満足感というものもなくはなかった。人間の感ずる生活の充実感などというものは、積木細工のように単純なものにすぎない。何人かの人間が同じ屋根のもとに集り、なにほどかの義務感をもち、毎日確実に顔をあわせ、不意に足もとからすべてが崩れる恐怖を伏せつづけることに成功すれば、人は最低限幸福なのだ。彼は最初、職員たちをすべて対等視しようとした。ひとたび去って帰らぬ見はてぬ夢の片鱗におされて——。しかしそれよりも小刻みな位階制を採用する方が、人間は安心するのだという貧しい真理をふたたび彼は確認させられた。あらゆる制度と習慣を利用して各人に各々固有の自己を忘れさせること、そして非個性的な使命感と満足感をこまぎれにわかち与えること……それが組織形成のコツなのだ。集ってきた共鳴者たちは何らかのかたちにおける社会での失敗者であり、何らかの劣等感の持主だったが、失敗者やコンプレックスの持主の多くがそうであるようにおそろしく道徳的で生真面目だった。保育や教育そして職業指導についての研究会や講習会をひらけば、一日の疲れに目を血走らせながらも、意見を発表し書物を読んだ。かつての満洲青年連盟のオルガナイザーは、戦後の孤児院の院長として、所員たちの一つの光だった。職員たちには、若くして白髪と化した彼の異相すら、教祖的な象徴となった。新聞社が毎年、各種事業団や研究団体に与える補助金付与の選に入ったのを心から喜んだのも、青木自身よりも、やりきれぬほど善意な職員たちだったかもしれぬ。

「皆は園長先生のお帰りを待ってますでしょうけれど、二、三日休養なすった方がいいと思いますわ。わたくしが先に帰って報告しておきますから」

「私が壇上で立往生したとき、ニュース映画社の撮影班がきていたんじゃなかったかね」

「かまいませんわ、そんなこと。先生のこれまでの御苦労は、なにもおっしゃらなくたって人々には伝わりました」と確信ありげに彼女は言った。

誰にその観念を植えつけられたのか、彼女が公式的な社会主義の教条を信奉していることに早くから青木は気付いていた。彼女としては、目だたず報われぬ労作が、目だたぬゆえに、もっとも確かな運動の拠点であり、ともすれば風化しがちな〈真理〉の原点であるらしかった。彼はその融通のきかない頑なさを信頼していたが、日頃に似ぬ標準語のよそよそしさに、不意に、まったく縁のない人間がそばにいるという寂寥感にとらえられた。およそ自分の感情を抑制するすべもしらず、その時々の情緒に支配されて、むきだしの大阪弁を喋り散らす日頃の秘書はどこへいってしまったのか。

「それじゃ、私は一つだけ旧友の招待に応じてこよう。君もどこかで思い切り豪華な食事でもするといい。明後日の夜には帰ると、留守番役の人たちに電報を打っておいてほしい」

彼は指図する姿勢をとりもどし、折から入構してきた国電のヘッドライトに照らされて浮きあがった雨脚をちらりと流し目に見て、改札口へとひきかえした。

「先生」とハイヒールの音をたてながら背後から秘書が言った。式典の緊張から解放されて、その時はじめて彼女は日頃の彼女にもどっていた。

「薄情やわ、先生、うちもつれてって」

3

「どうしたんだ、君らしくない」

招待主の元関東軍参謀大尉岸井忠臣は、すでに飲みはじめていたらしい盃を唇の高さに捧げもったままの姿勢で、青木を凝視した。青木はしばらく敷居の垂れ幕のところでためらっていた。奉天の東洋拓殖株式会社の階上にあった関東軍司令部へ、時折りたずねていった際も、たとえば同僚に地図を指示しておれば、右

腕を壁の地図にむけたままの姿勢で扉の方を振りかえり、しばらく訪問者の目をじっと見すえるのが彼のくせだった。寄る年波にもめげず、ペシミスティックに歪められた大きな唇は、酒にぬれて魁偉に光っている。当時、石原莞爾中佐直系の参謀将校だった彼は、いま東南アジア向けの貿易商社の重役のはずだった。

「ごぶさたした」と青木は言った。ことさらに戦後文通を絶っていた十数年間、まったく会わなかった過去の二、三の知己が同じテーブルにならんでいた。もと満洲国総務庁主計処課長桜井信明、もと満鉄調査部員林秀光、拓務省参議小池二郎、関東軍参謀部第三課嘱託早瀬勇権、奉天文治派于冲漢の顧問の一員であり、のちには清朝遺臣鄭孝胥の息子鄭華とも交友のあった芝安世。早瀬勇権、芝安世はいわゆる満洲浪人であったが、早瀬とはとりわけ親しく、東亜同文書院で机を並べていらいの旧知であった。

秘書の水谷久江は廊下で遠慮して、庭の泉水を眺めている。青木は振返ってうながした。

「珍しい料理をくわせる店でね」久濶の挨拶もなく、早瀬が席につくようにうながした。「君を多少なつかしがらせてやろうと思ったわけだ」

その部屋にかかっている扁額には、どこで手に入れたのか羅振玉の署名があった。北支の妓館を模擬した調度はむしろ悪趣味だったが、席が椅子であるのがせめてもの救いだった。青木は日本式の料亭や芸者をこのまない。彼は自分の背後に小さくかしこまっている秘書を紹介した。秘書の方には、しかし居並ぶ面々の経歴はつたえなかった。そこに漂う異様な雰囲気だけで、青木を一種宗教的な人格者と思いあやまっている水谷久江を驚かすのに充分だったからだ。

「きさまが混血孤児院の院長におさまっていたとはおどろいたね」開拓移民の指導者だった小池二郎が言った。彼は常になにかを悲しむように目をうるませている。無残に耄けてしまった彼は、しばしば塵紙を目にあててやにを拭った。交換した名刺には厚生省嘱託の肩書があった。

「一本の真直ぐな箸でも湯につければゆがんでみえるものよ」元参謀は微笑した。「青木は五族協和の観念の権化のようなものだった。満鉄社員や軍人の生活と満洲土民の生活水準にあまり大きな落差のありすぎる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com